

時計の針を、少しだけ戻してみよう。

右腕を失った <sup>マッシュロッド</sup> 破碎棍 マクダニエルが、場外に転がり出た、その瞬間。

『た、只今の勝負 勝者、デスピサロ選手 』

場内に響くアナウンス。

生気のない、ウグイス嬢の声。

その様子を見て、その声を聞いていたのは

戦っている当人たち、そしてリングサイドで見えていたエンドール王親子とブライだけでは、もちろん、なかった。

<sup>スタンド</sup> 観客席中段。

「 」

言葉もなく、拳を握ったまま、<sup>リング</sup> 戦闘台を見つめる、細身の若者。

青い<sup>チュニック</sup> 短衣に白いズボン。

後ろで束ねた長髪。

ブーメラン使い、バトランドのラゴスだ。

言葉には出さねども、彼の想いは全て、その額に流れる一筋の冷や汗に現れていた。

「半端じゃあ ないわね」

長いフードで身体を隠した女魔道士・ビビアンが、ひとことだけ言う。

フードの奥の表情までは、余人にうかがい知れる事もない。

「あれを倒せば優勝、ってか」

頭をぼりぼりと搔く、<sup>スチール</sup> 鋼 のサイモン。

苦い顔でつぶやく。

「冗談きついで？ なあ」

「ぐふ ぐふ ぐふふふふ」

いつもの調子で笑うペロリンマン。

しかし、その心中は

そして

「な、ななな　　なんて　　こった　　」

<sup>スタンド</sup>  
観客席の後方の座席で、腰を抜かしている男。

<sup>グレイ</sup>  
灰色の作業着のようなつなぎに身を包み、銀色の髪を逆立てている。

その左腕に巻かれた、「PRESS」と書かれた腕章。

街灯配布新聞「エンドール・ニュース」編集共同責任者のひとり、ケントである。

アリーナ対ハン戦を見た相棒ロビンソンと交代で、この試合を観戦していたのだが

「こんな　　こんな奴がいたなんて　　」

つぶやきながら、ふらふらと立ち上がり、ケントは<sup>スタンド</sup>観客席の出口へと向かった　　。

あまりに凄惨な、この試合。

それが、この大会のみならず、このエンドール王国そのものを、そしてこの世界の全てを暗い闇と混沌に巻き込む、その「引き金」であった事に気付く者は、まだ誰もいなかったのである　　。

\*

この物語は、後に「不屈の<sup>ハイネス</sup>王女殿下」と呼ばれる、サントハイム聖王国第一王女、アリーナ・フォン・サントハイム殿下の、熱く激しい闘いの記録である！

---

熱血格闘系・ドラクエ4二次創作小説

## 「不屈の王女殿下（ハイネス）」

～エニックス「ドラゴンクエスト4・導かれし者たち」第2章より～

第13話 「惨劇ののちに」

あさづけ兄貴

---

王城前広場。

「すまん、ちょっと通してくれ！」

大声を上げながら、城の方向から、ひとりの兵士が全力で駆け抜けていった。

「な、なんだなんだ？」

その様子を遠目で見ていた人々が、口々に言う。

「教会の方に走っていったぞ？」

( ？ )

訝しげに、走り去る兵士の後ろ姿を見つめる、灰色のつなぎを着た眼鏡の男。  
街頭配布新聞「エンドール・ニュース」編集者のひとり、ロビンソンである。

( 何だ？ 何があった？ )

エンドール城には、王室付きの神父がひとり、常駐している。

にもかかわらず、兵士が教会に走った、その理由。

ロビンソンは、直感した。

( 大事だ！ 城の神父さんじゃ対応できない、それほどの！ )

そして、その直後。

もう一度城の方を見たロビンソンの、その視界に飛び込んできたのは

ふらふらとこちらに歩み寄ってくる、男の姿。

金髪を逆立てた、灰色の ロビンソンとまったく同じつなぎを着た、男の姿であった。  
あれは！

「ケント！？」

そう。

彼はケント ロビンソンの相棒、「エンドール・ニュース」共同編集者のひとりだ。

彼は、武術大会本選第一試合、デスピサロ対グライア戦を取材していたはずであった。  
その彼がここにいるということは、試合が終わったということに他ならない。

だが

明らかに、ケントの様子が普通でない。

ふらついた足取り。  
焦点の定まらぬ瞳。

一体、彼に何が起こったのか？  
一体、彼は何を見たのか？

ケントは、広場の真ん中　彼らの新聞売りの口上を見ていた見物人たちの前までやっ  
と歩いてくると、そこで、ふらっと倒れ込んだ。

「ケント！」  
ロビンソンが駆け寄る。  
ぐったりした様子のケントの体を、二、三度揺さぶる。  
「どうした！　何があった！？」

「ロビンソン　」  
ようやく、少し平静を取り戻したのか。  
ケントは、ゆっくりとした口調で、言った。  
しかし、その内容は！

「死んだ　みんな死んだよ　。あいつが　皆殺しに　」  
「！？」

＊

「開門！開門を！」  
街の西に位置する、エンドール聖教会本部。  
その前で、先ほどの兵士が、声を張り上げる。

程なく、その正面の扉が、重いきしみ音をたて、ゆっくりと開いてゆく。

中に立っていたのは、まだ若い、神官装束の青年　恐らくは、修行僧か何かといった  
ところであろう。

「何事です」  
静かに言う青年。  
「武術大会で瀕死の重傷者が出た。サントハイムの神官殿が救命中だ」  
淀みなく、兵士はそう言った。

そう言うよう、彼はクリフトから念を押されていたのだ。

「何ですって！」

サントハイムの名を聞いた途端、青年の顔がこわばった。

サントハイムは、彼ら「聖教会」の総本部がある国。

そして、その直属の神官と言え、その信仰も、知識も、そしてそれを活かす業も、世界の神職の中では比肩すべき者がいないほど、レベルが高いものを持っているはずであった。

本来、闘技場で瀕死の重傷者が出たのであれば、王城付きの神父が事に当たるはずである。

そして、それでも手に負えぬような重傷者であれば、闘技場からこの教会本部に運ぶまでの間に息絶えてしまうのが関の山である。

だが、サントハイムの神官が救命処置を続けているとすれば、話は全く違ってくる。

重傷者は、生きてこの教会までたどり着くことができるかもしれない。

そして、そうだとすれば

事は一刻を争う！

「お、お待ちくださいっ！」

青年はそう言う、あわてて教会の中へ駆け込んだ。

＊

教会の中心部、司教執務室。

「サントハイムの神官殿が？」

兵士からの情報を報告した青年僧にそう聞き返したのは、上質の黒い僧服に身を包んだ、長身の男である。

年は壮年、五十台といったところか。生気に満ちた瞳とは対象的に、白髪をオールバックにしている。

エンドール聖教会本部主任司祭、<sup>ビショップ</sup>司教 イスマイルである。

サントハイムの聖教会本部から、エンドール王国における教会運営、布教 その一切を任された、名実ともにエンドールにおける聖教会の最高責任者であった。

「わかった」

イスマイルは、短く答えると、矢継ぎ早に対応を指示した。

「君と、あと二人、闘技場に急行してくれたまえ。救命具と担架を忘れずに」

「わかりました」

「うむ。神のご加護を。アゝいませ」

「アゝいませ」

決まりの聖句を口にし、青年僧は部屋を出た。

「お待たせいたしました」

教会の戸口で待っていた兵士に声をかけたのは、先ほどの青年僧であった。

後ろに、二人の僧を伴っている。

二人とも、この青年と同じ年頃の、若い男であった。

うちひとり、小脇に担架を抱えている。

担架はかなり大きいものだが、軽々と抱えているところを見ると、よほど工夫をこらして軽く作ってあるか、僧が日頃の修道を通じて鍛錬を積んでいるか　恐らくはその両方なのであろう。

そして、もうひとり、両手に、大きな袋をぶら下げていた。

その中には、クリフトが即席で作ったのと同じ、聖水を薄めた生理食塩水を満たした革袋をいくつか、それを血管内に送り込むための管と注射針。

「参りましょう」

「うむ、よろしく頼む！」

僧たちと兵士は、足早に教会を後にした。

\*

司教イスマイルが、ひとり残される。

( 武術大会　か )

椅子から立ち上がると、イスマイルは執務室を出た。

廊下を歩きながら、考える。

(にしても、いつになく、今回は荒れている )

隣の部屋の、ドアを開ける。

その部屋のベッドの上では、引き締まった体をした弁髪の方が、静かな寝息を立てていた。

「拳聖」ミスター・ハン。

先ほどの死闘の後、彼はこの教会に運び込まれ、呪文による傷の治療を受け、そして、使い果たした体力を補うべく、眠りについていたのである。

\*

「で、そのデスピサロってのが、他の十五人を一度に殺してしまった、ってことか 」

ケントの口からもたらされる、驚くべき真実

デスピサロが、Aブロックの選手全員を同時に相手にし、なおかつ、無傷で全員を殺してしまったという、その恐るべき報告は、ロビンソンはじめ、見物客一同を恐怖で凍り付かせるのに十分なものであった。

「最後のやつは、腕を斬られて場外に逃げた。あの後、控え室に運ばれていったが あ  
の出血じゃあ、助からない」

「なんてこった」

冷や汗を拭いながら、ロビンソンが言う。

「ミスター・ハンが負けたと思ったら、今度はAブロック皆殺しか 」

やや間を空けて、続ける。

「それにしても、異常だな、今回の大会の荒れっぷりは」

司教イスマイルと同じ言葉を、彼は口に出した。

と、その時である。

「すまん、道を空けてくれ！」

大声とともに、今度は教会の方から、男が四人、走ってきた。

「うわっ!？」

彼らの脇をかすめ、王城の方へ、広場を駆け抜ける。

「 ったく、さっきから何なんだ」

悪態をつくロビンソンであったが

「担架？」

「えっ？」

ぼそっと、ケントが言った言葉を、彼は聞き逃さなかった。

「あいつら あの服、教会の修道士だよな？」

「ああ、たしかに」

「あのうちのひとり、担架を抱えてなかったか？」

「？」

ロビンソンは、先ほどの四人組の姿を思い返してみた。

先頭は、王城の兵士 先ほど教会方面に走っていったのと同人物だろう。

顔をはっきり見たわけではなかったが、叫ぶ声と同じだった。

問題は、残り三人。

僧服に身を包んだ若者 ケントの言う通り、教会の修道士であろう。

そして、確かに、そのうちひとは、小脇に大きな白い板のようなもの、そう、ちょうど担架のようなものを、小脇に抱えていたのだった。

ケントの思考が、一瞬、深淵に沈む。

あれが本当に担架ならば、そして彼らが王城に向かっているならば、王城、あるいはその奥の闘技場で、教会への救急搬送が必要な急病人、あるいは重傷者が発生したことになる。

王城付きの神父も、その任を務めるのに十分な実力を備えている。

その彼にも、どうすることもできない事態

(闘技場だ)

ロビンソンは再び直感した。

(あそこは呪文が封じられている。あそこで何か起こった いや！)

そう、その直感は、「何か」などと曖昧なものではなかった。

先ほどの、ロビンソンの報告だ。

『最後のやつは、腕を斬られて場外に逃げた。あその後、控え室に運ばれていったが あの出血じゃあ、助からない』

ロビンソンの言うことが本当なら、今彼らが急ぐ理由は、ひとつしか考えられない。  
その「腕を斬られた選手」が、まだ生きているのだ。彼を教会に運び、手当てをするつもりなのだ。

もちろん、なぜ彼が生き長らえているのか、その理由はロビンソンには分からない。  
その場に居合わせたサントハイムの神官が、その知識と訓練の成果をフルに活かし、驚くべき冷静さと勇気をもって、呪文抜きで彼の救命に成功したことなど、もちろん彼には知る由もないのだ。

「ケント！」

「ああ、間違いない」

どうやら、ケントも、同じ結論に達しているようだった。

「あの腕を斬られたやつだ。あいつがまだ生きてやがるんだ」

そう言うと、ケントは立ち上がった。そして見物客に呼びかけたのだった。

「みんな、道を空けてくれ！ もっと広く、広くだ！」

その声に応じ、見物客たちは、広場の真ん中から、それぞれ、端の方にぞろぞろと移動した。

「来るぞ。あの連中はもう一度、ここを通る。怪我人を教会まで運ぶためにな」

ロビンソンも、無言でうなずく。

固唾を飲む群衆。

そして！

「来たぞ！」

誰かが叫んだ。

城の方から、走ってくる者たちがいる。

三人の、僧服の男たち。

うち二人は、担架を前後から支え持っていた。

担架には、上半身裸の大柄な男。

左腕が無かった。

残るひとりの僧服の男は、両手に革袋を高く掲げ持っている。

その革袋からは細い管が延び、担架の上の男の、残った右腕につながっていた。

全速とまではいかないまでも、人ひとりに乗せた担架を持っているにしては相当速いスピードで、彼らは広場を通り過ぎてゆく。

その様子を、ケントは、じっと見ていた。

\*

彼らが通り過ぎた後。

ケントが、ぼそっと言った。

「間違いない。あいつだ」

「その腕を斬られた、って選手か？」

「ああ。あの顔だった。左腕も確かに無かった」

わずかの間の後、ロビンソンが答えた。いや、新たな疑問を投げかけたのだ。

「血が 出てなかったな」

「！」

思わず、ケントがロビンソンの顔を見る。

ケントは、確かに見たのだ。

デスピサロの「真空波」が彼の腕を切り落とすのを。

そして、その瞬間から、彼が選手控え室に運ばれるまでの間に、かなりの量の血が、その傷口から吹き出していたのを。

腕を切り落としたほどの大怪我で出る出血は、普通の小さな傷のそれとは違い、そう簡単に止まるものではない。

「そういえば」

「出血がひどかった、助からなさそうだった、って言ってたよな」

「ああ」

「でも、実際には、血は止まっている。そしてあの選手も生きてる」

「だが、どうして」

「それを取材して確かめるのが、俺たちの仕事だろ？」

そう言って、立てた親指で自分を指すロビンソン。

確かに、彼らは、いやケントは、大量虐殺の目撃者であった。

しかし、それ以前に、彼とロビンソンは、新聞記者であったのだ。

「世界の都」と呼ばれる大都市エンドールの、その街に日々起こる様々な出来事に、誰よりも深く切り込み、誰よりも速く伝える。

それが、街頭新聞「エンドールニュース」発行者としての彼らの責務であり、また、同時に彼らの日頃の行動指針でもあった。

「んじゃ、次の当番は俺、ってことで。教会行ってくるわ」

「すまん、頼む」

ケントが答えた。

これほどの大ネタなら、普段なら、どちらが取材するかを巡って、ケンカとまでも行かないまでも、言い争いぐらいはするだろう二人

だが、ケントはあっさりと、その仕事をロビンソンに譲った。

惨劇を目の当たりにしたまだショックが癒えていない

わけでは、実は、無かった。

「こっちはこっちで、大会に動きがあったら掴んどくわ」

今ひとつ話が呑み込めていない様子のロビンソンに、ケントが真剣な目で言った。

「動き？」

「俺は直接見たからな。あいつは　　デスピサロはやば過ぎる」

「　　」

「あんな奴が出てたんじゃ、他の誰も優勝できっこない。優勝はあいつに決まりだ  
だとしたら、今回はもう、真っ当な大会にはならないんじゃないか？」

「じゃ、じゃあ　　」

「もしかしたら、大会がここで中止になるかもしれん、ってことさ」

ケントの目は、真剣そのものだった。

「自分の娘が懸<sup>か</sup>かっているんだ。俺が王様なら、あんなやつに嫁にやる前に、大会を中止にする」

広場を、一陣の風が吹き抜けてゆく。

今、自分たちが体験している状況が。

そして、これから、自分たちが見て、そして聞くことが、恐らくはいずれも前代未聞の一大事に違いない。

そのことを、ケントもロビンソンも、心のどこかで感じ取っていた。

「ケント　　」

「てなわけだ。そっちは頼むぜ」

ぼん、と、両手でロビンソンの両肩を叩くケント。

「おーよ」

ロビンソンは、ウインクしてみせると、きびすを返した。

「じゃあ、行ってくる」

軽く手を上げ、教会へと歩いていく。

「と、いうわけでだ」

つぶやくと、ケントは群衆の方に向き直り、いつもの掛け合いの口調で、言った。

「ま、大変なことになったわけだ。さっきの選手の件は相方に任せて」

そこで、どっかと、その場に腰を下ろす。

「もう少ししたら、俺も闘技場コロシアムの方へ行ってみる。それまでちょっと休憩！」

そう、やけ気味に叫んだ後で、誰にも聞こえない小声で、一言。

「なんなんだ、本当に」

＊

王城、グランドホール大広間を見おろす特別室。

今朝、組み合わせ抽選会の一部始終を見たこの部屋の前に、ブライは再び立っていた。

『知恵を貸してくれぬか』

エンドール王オーギュストに請われ、彼に連れられてきたのが、この部屋だったのである。

眼前に立つオーギュストが、傍らの兵士に声をかける。

「大会は一時中断。今後の予定に関しては決定し次第発表する。その旨、申し広めよ」

「はっ！」

兵士は敬礼とともに答えると、足早にその場を立ち去った。

それを見送ってから、オーギュストは改めてブライに声をかけた。

「ではブライ殿、入られよ」

勧められるまま、王に続き、ブライは部屋に入った。

作り付けの椅子に、オーギュストが腰掛けるのを確認してから、ブライも腰を下ろす。

窓からグランドホール大広間を見おろしながら、オーギュスト王が言う。

「あの抽選会から、まだそれほど経っていないというのに　　なにか、もうあれから何日

も経ってしまったかのようだ」

ブライは、無言である。

「抽選会に、あの者は来なかった」

「デスピサロ、ですな」

ここでブライが口を開いた。

分かりきったことを、あえてブライは口にした。

自分の思考を整理するとともに、相手の思考をも同時に整理させ、円滑に話が進むよう仕向ける。さりげない、しかし経験を感じさせる話術だ。

今は亡き先王アレクサンデル四世、その子である現王ベルンハルト、そしてその一人娘である王女アリーナ。この三人、いわばサントハイム王家そのものの悩みを、もう数十年に渡って聞き続け、適切なアドバイスをし続けてきた人物である。このような話術が身に付くのも、いわば道理であった。

「うむ」

オーギュストは、うつむくと、再びブライの方を向き直り、言った。

「ブライ殿。あの者をどう思う」

シンプル、かつ深い問いであった。この問いにどう答えるかで、これからの話の流れが決まる。

「ふむ」

一言言った後、ブライは顎ひげを触りながら、しばし考え込んだ。そして答えた。

「強い。ですなあ」

間を置く。そして噛み締めるように、付け加える。

「強すぎる」

「抽選会に来なくても、良かったわけだ」

再び、<sup>グランドホール</sup>大広間に目をやる王。その表情は硬い。

「あれほどの力を持っていれば、相手がどのような選手であろうと、関係ないのだからな」

長い沈黙の後。

再び、王が切り出した。

「ブライ殿。余は、この大会をここで中止するべきであろうか」

\*

「ベホマ」

イスマイル司教の張りのある低音が、聖堂に響く。

怪我人　マクダニエルを聖堂に運び込み、真ん中にしつらえられた仮設ベッドに手早く寝かせると、さっそくイスマイルは彼の治療を始めたのだ。

マクダニエルの身体の上にかざしたイスマイルの手が淡く輝き、そしてその輝きが、光の粒となって、その身体に降り注ぐ。

神の聖なる力が、マクダニエルの身体の隅々、その細胞のひとつひとつにまで行き渡り、新陳代謝と細胞の分裂、組織の再生を促した。

切り落とされた左腕が、再び元の姿を取り戻してゆく。

青ざめていた顔色が、元の健康そうな色つやに戻っていった。

その様子を満足そうに見ていたイスマイルは、ふと、思い当たったようにつぶやいた。

「『鈴蘭』を使った、と言っていたか」

そして再び、マクダニエルの身体の上に手をかざし、唱える。

「キアリー」

解毒の呪文。

いまだマクダニエルの体内に残る「鈴蘭」、すなわち強心配糖体コンバラトキシン。

この物質が、心臓の弱った人間にはその収縮を助ける作用をするが、常人には逆に毒物となる事は、既述の通りである。

それを無毒化するための呪文であった。

「これで、よし」

「負傷者か」

満足そうな表情を浮かべるイスマイルの背後から、声が掛かった。

低い、落ち着いた声。

振り向いたイスマイルの眼前に立っていたのは

頭から後ろに垂れる、一本の弁髪。

髪の色と同じ黒の口髭。

穏やかな、茶色の瞳。

身を包んでいるのが、トレードマークの緑色の拳法着でなく、教会に用意されている水色の簡素な寝間着であるとはいえ、その姿は、ミスター・ハン <sup>ナイトンツ</sup> 拳聖 と呼ばれていた男のそれであった。

「ハン殿 まだ寝ておられた方が 」

「いや、大丈夫だ」

穏やかだが力強いハンの声が、イスマイルの心配を封じる。

回復呪文で傷は治してあるとはいえ、それで試合の疲れまで癒えるものではない。

ましてや、あれだけの死闘である。

(普通の武術家ならば、まだ立ち上げられる状態ではあるまいが )

ハン<sup>の</sup>回復力に感心するイスマイル。

だが、当のハンは、そんな司教の感心をよそに、自らの興味を、彼の前に横たわる大男に注いでいた。

「治療後 か」

イスマイルも、その大男 マクダニエルに目を落とす。

「A ブロックは、彼と、デスピサロという選手以外 全員亡くなったらしい」

「 なんだと? 」

沈痛な声色のイスマイルの言葉に、一瞬、ハン<sup>の</sup>声<sup>が</sup>荒らげられる。

「そのデスピサロ選手が、A ブロックの他の十五人と一時に戦ったのだそうだ」

「 皆殺し、というわけか」

「この選手も命が危ない状態だった。サントハイムの神官殿が救急の手当てを施した、そのおかげで、ここにたどり着くまで長らえることが出来たらしい」

「サントハイムの 」

その単語に、ハン<sup>が</sup>反応する。

「あの姫君<sup>プリンセス</sup>のお付きか? 」

「恐らくはそうだろう」

マクダニエルを見下ろしたまま、続けるイスマイル。

「右腕が切断されておったが、完全に出血が止まっていた。弱った心臓の動きを補うために、薬まで使ったようだ 全てが、まさに的確であったよ」

しみじみと、イスマイルは語る。

「確かな技術と判断力、そして勇気がなければ、ここまでのことは出来ん。この選手の命を救ったのは、まさにその神官殿の技と心だ、と私は思う」

「 なるほど」

今度は、ハン<sup>が</sup>、しみじみと言う。

彼の脳裏には、先ほどの戦いが あの特別予選が、鮮やかに再現される。

蟹<sup>クラッペ</sup>の痛み、 楔<sup>カイル</sup>の腕の痺れ、そしてあの王<sup>ケーニツヒ</sup>。  
決して逃げない、正面から向かってくる、あの強い意志を湛えた瞳。

アリーナ・フォン・サントハイム。  
恐ろしい敵にして、尊敬すべき武術家。

「王女が王女なら、お付きもお付き、とすることか」  
苦笑めいた笑みを、ハンは浮かべた。

\*

「大会を中止なさる とな」  
ブライの目が、一瞬、険しさを増す。

オーギュストは、調子を変えず、話し続ける。  
「あの男が優勝する。このままではな」  
その目つきが、ブライのそれに劣らず、険しくなる。  
「表情も変えず、何人もの人間を殺せる男に、娘を嫁にやるわけには行かぬのだ」  
決して強くないが、確とした語気。

(元はと言えば、お主があんな約束をしたのが悪いのじゃろうが)  
そうは思ったものの、もちろん、それを口に出すような愚を犯すブライではない。

「それで、大会そのものを中断なされると」  
「他に方法がない」  
言い放つオーギュスト王の声に、石壁の冷たい残響<sup>リバーブ</sup>が重なる。  
「 そのようにしか、余には思えぬのだ」

「ふむ」  
目を閉じ、顎ひげを二度三度さすって  
ブライは、なにげない、ごく自然な口調で、言った。  
「いけませんな」

「いけない？」  
その言葉が理解出来ない、という表情で、オーギュストが聞き返す。

「御意に。断じて大会を中断などしてはならぬ、ということです」  
先ほどより語気を強めて、ブライは答えた。

重い沈黙が、小さな部屋を満たす。

<sup>グランドホール</sup>大広間を臨む窓からの光が、二人の横顔に強い陰影を作り出す。

「ブライ殿」

感情を押し殺した声を、オーギュスト王は発した。

「そなたは、長年サントハイムを支えた聡明な魔道士だ。そしてそなたは、余とともに、あの男の戦いを見たはずだ。あの惨劇を」

ブライは、無言。

「そのそなたが、当然の事のように『いけない』と言うからには、何か考えがあるのであるうな」

あの絶対的な強さ。

デスピサロにかなう者は、今回の参加者の中にはいるまい。

であるからこそ、大会の継続は、イコール、デスピサロの優勝であり、それはすなわち、愛娘がああ恐るべき<sup>ジェノサイダー</sup>虐殺者のものとなる、ということだ、と　オーギュスト王は、そう思っていた。

そして、かつては、魔法兵団長、「凍嵐の魔人」の異名を取る世界屈指の<sup>フリーザー</sup>凍術士としてサントハイムを守り、現在はサントハイム王ベルンハルトの懐刀として、サントハイムの「頭脳」の役割を担う人物。

この、目の前の白髪の老人に対するオーギュストの評価は、先ほど自身が口にした通りであった。

だからこそ、ブライが迷わず「中断してはいけない」という言葉を口にしたのが、奇妙に感じられてならなかったのである。

「陛下」

答えたブライの口調は、重かった。

そして、その次の彼の言葉は、あまりにも衝撃的であった。

「僕の考えがもし当たっておったならば　もしここで大会が中断すれば、この国がいや、この世界が滅びますぞ」

「この世界が　滅ぶ？」

予想だにできなかった言葉を聞き、困惑するオーギュスト。

「それは一体　　」

言いかけたオーギュストを制するように、ブライがたたみかけた。

「少々長くなりますが、良うお聞き下され。真にこの世界の未来に関わる事ゆえ」

「う、うむ」

釈然としない心持ちで、オーギュストはうなずいた。

武術大会を中止するか否か、その話が、いつの間にか、世界の危機の話にすり替わっているような気がする。

そんな心中を知ってか知らずか、ブライは急ぎ話を進めてゆく。

「デスピサロの戦いを、先ほど見せていただきましたが　二つの事に、気づき申した」

「二つの事？」

「まず、一つ」

ブライの目に、冷たい光が宿る。

「恐らく、彼奴は人間ではございませぬ」

「人間では、ない　？」

「御意に」

「どういう意味だ」

「意味も何も、文字通りですじゃ」

さも当然、という、ブライの口ぶり。

「先ほどの試合で、彼奴の耳を見ました」

「耳？」

「この、耳の上の部分ですな、こう　尖っておりました」

ブライの指が両耳の上を動き、その軌道が、デスピサロの耳の形を再現する。

「人間では、あり得ぬ形かと」

「なるほど　」

「それと、もうふたつ」

「ん？」

「彼奴が人間でない証拠です」

ブライの話に、熱がこもり始める。

「まずは、彼奴の技」

「確かに、あの剣技は凄まじいものがあった」

「それだけではございませぬ。最後の二人、ひとりには爆裂の魔法で、もうひとりには絞め技で、それぞれ仕留められておりましたじゃろう」

「確かに」

「剣や格闘術と、魔法とは相性が悪い。人間であれば、その三者を全て極める事など出来ませぬ」

「なるほど。人間でない証拠、というわけか」

「もうひとつ、あの剣もそうですな。他の選手の剣を折り、そのまま頭を切り裂いたあのような切れ味の剣は、人間には打てませぬ」

「人間でなければ、何だというのだ」

微かにいらつきを含んでいるかのようにも聞こえる、オーギュストの問い。

そのいらつきを増幅しないよう、ブライは的確に答えた。

「恐らくは、<sup>デミヒューマン</sup>亜人間」

「<sup>デミ</sup>亜 <sup>ヒューマン</sup>人間？」

「我々人間に似た、しかし人とはわずかに異なる種族です」

確かに、そのようなものが存在する、という話は聞いた事がある。

しかし、オーギュストは、いやブライとて、その時にはまだ、実際に<sup>デミヒューマン</sup>亜人間を見た事はなかった。

「中でも、彼奴の姿形は、<sup>エルフ</sup>樹精と呼ばれるもののそれに酷似しております。長身、尖った耳、そのいずれもが」

「では、あの男は、その<sup>エルフ</sup>樹精だと」

「かもしれませぬ。しかし、じゃとすれば、腑に落ちぬ点がひとつ」

「？」

「僕の知識が正しければ、ですが、<sup>エルフ</sup>樹精は争いを好みませぬ。このような場所に出る事はありますまい」

「だが、変わり者の<sup>エルフ</sup>樹精かも知れぬぞ」

「御意に。あるいは、他の何かか」

「例えば？」

「残念ながら、それは分かりませぬ」

この世界において、<sup>デミヒューマン</sup>亜人間の存在は、人間にはほとんど知られていなかった。

彼らが人間との接触を極度に嫌い、その手の及ばぬ山奥や森の中などに、ひっそりと隠れ住んでいたからである。

たとえ「生き字引」のようなブライほどの人物であっても、その知識にある<sup>デミヒューマン</sup>亜人間と言え、<sup>エルフ</sup>樹精や<sup>ドワーフ</sup>地精、<sup>ホビット</sup>小人程度。デスピサロの真の正体である「魔族」、すなわち神と対極にある悪魔の<sup>けんぞく</sup>眷属にまでは、考え及ばなかったらしい。

「そうか」

残念そうな表情ののち、オーギュストの顔に、疑念が浮かぶ。

「だがブライ殿、その事と、先ほどそなたが言った『この世界が滅ぶ』こととは、どう関係が？」

「それが、先ほど申した『気が付いた事』の二つ目でしてな」

ブライの声のトーンは、相変わらず重い。

「人間でない故でしょうかのう。彼奴は、人間そのものをひどく憎んでいるように見受けられます」

「人間そのものを　ひどく　憎んでいる？」

その言葉が、実に禍々しい響きをもって、オーギュストの脳に刻み込まれてゆく。

「もっと具体的に申しますと、彼奴は、人間を滅ぼそうと考えておる　そう思われる節がございますれば」

ブライの口調は、変わらない。

その事が逆に、話す内容の凄みをいや増して感じさせた。

オーギュスト王の額に、冷や汗が流れ落ちる。

何も、言えない。

石壁に染み込むがごとき沈黙。

王が何も言えぬのを見越してか、ブライが話を続けた。

「彼奴は、他の選手を『人間』と呼んでおった。そして、最後のあの腕をもがれた選手に、『いずれ貴様のような者も殺す日が来る』と　そう言うておったのを聞き申した。

抵抗せぬ者をも、つまり『世界の全ての者を殺す』と言うておるのでしょう」

「それは」

蒼白な顔で、王が言う。

「それはまさに、ブライ殿の言う通りではないか。世界を滅ぼそうとしている」

だが。

それならば　？

オーギュスト王の脳内を、強い違和感が駆け抜けた。

「ならば！ ブライ殿！」

オーギュストの語気が強まる。

「なおのこと、ここで大会を中断すべきではないのか！？」

ブライの右眉が、ぴくりと動いた。

「ほう」

そして、問う。

「何故に、そうお思いですか」

「世界を滅ぼすのに最も手っ取り早いのは、国を滅ぼす事　そして、国を滅ぼすのに最も手っ取り早いのは、王家を滅ぼす事。そうではないか」

オーギュスト王の思考が、次第にまとまってゆく。

「御意に」

「ならば、モニカを婿として子を作らず、そして余が死ねば　王家は絶える」

「子を作り、次代の王に据える。その上でその幼王を裏から操る、という手もありますな。さすれば、エンドールを滅ぼすのではなく、逆に利用する、と言う事も出来ますれば」

誇り高きエンドール陸軍が、悪魔の使徒と化し、世界の街を、村を蹂躪する　そのような悪夢のような光景が、オーギュストの脳裏をよぎる。

「そのような事が　許されて良いはずがない」

「まったくですな」

「ならば！」

バンッ！

オーギュストが、突然机に掌を叩き付けた！

「ならばなぜ、大会を中断してはならぬと、そなたは申すのか！」

一気にまくし立てる。

「大会を続ければ、あの男が優勝する！　そうすれば、この国が滅ぶのだぞ！」

「　陛下」

ブライは、詰め寄るオーギュストの目を見据えたまま、言った。

厳かな、しかし力強い声だった。

「確かに、彼奴が優勝すれば、世界の滅びの引き金となりましょう。　ですが、ここで大会を中断することもまた、この国に滅びを引き起こしますぞ」

時が止まったかのような沈黙が、小さな特別室を満たす。

「なん だと？」

オーギュストがゆっくりと、放心したような表情で、身を引く。

「何故だ！ 何故に、大会を中断すれば、国が滅ぶと？」

「失礼ながら、陛下はお忘れではございませぬか」

オーギュストの心の中を射抜くがごとき、プライの視線。

「忘れている？ 余がか？ 余が一体何を忘れている？」

「大会の優勝者へモニカ姫を褒美に取らすという事が、陛下の民への約束である事を」

「！」

雷に打たれたように、オーギュストの身体が硬直する。

「王は民を導くもの それが民との約束を違えては、やがては民に見放されましょう」

「民に見放されたら」

オーギュストにも、プライの言わんとした事が（ようやく）伝わったのであろう。それに気付きつつ、ダメを押す。

「そう。民に見放され、離反されては、もはや王は王でなくなります。やがて民の暴動を呼び 王家は滅びますじゃろう」

その言葉を聞き

「なるほど。余が忘れておったのは、それか」

ほんの少し、オーギュスト王の視線が緩んだ。

「王として最も大切な事を 余は忘れておったか」

「国は王家と民と地より成る、というのが、亡き先王陛下の口癖でございましてな」

プライの視線も、少し柔らかなものになる。

「その薫陶を、いやと言うほど受け申した」

オーギュストも決して愚かな王ではない。そして彼は、決して普段から民衆をないがしろにした政治を行っているわけではない。

ただ、今回のような未曾有の事態にあたり、彼の思考が視野狭窄に陥っていたのである。それをプライはほぐし、正したのである。

「その通りだ だが」

再びくらい表情となるオーギュスト。

「だが、そうであるならば、大会を続けても、ここで中断しても  
唇を噛む。」

「いずれにせよ、我が王家は滅びの運命にあると言う事なのか」

「何を仰せか」

たしなめるブライの表情は、なぜか、明るい。

「陛下は既に、最善の選択をなさっておられるではありませんか」

「最善の 選択？」

「左様」

返事もまた、明るかった。

「陛下は、モニカ姫の将来をお賭けになったではありませんか。我が姫様に」

「！」

そうだ。

そうだった。

サントハイム王女アリーナ。

オーギュストは既に、彼女が王家からの「刺客」であることを公言した上で、彼女をこの戦いに介入させていたのだ。

「そうじゃブライ殿！ アリーナ姫が！」

それは、本来無関係であるはずのアリーナを戦いに巻き込んでしまった罪悪感からで、あったのかもしれない。

無意識に、オーギュストはそれを頭の中から追い出そうとしていたらしい。今の今まで、そのことを失念していたのだ。

「アリーナ姫が、あの男と当たるぞ！」

たとえアリーナがどれだけ勝ち上がったとしても、決勝戦で、Aブロックを制したデスピサロと戦わなければならない。

そして、アリーナがデスピサロと戦えば、その時は恐らく

「あの男には勝てぬ！ いや、命すら」

それに応えたブライの一言を、オーギュスト王は忘れないだろう。

落ち着き払った表情で、彼は王の目を見つめ、言ったのだ。

「姫様は負けませぬ。決して」

自らの言葉の正しさを、百パーセント疑っていない、そんな顔だった。

「分からぬ」

困った顔で、王が答える。

「ブライ殿。そなたは余といっしょにあの男の戦いを見たはずだ」

「いかにも」

「それでなぜ、それほどまでに落ち着いてられる？ アリーナ姫は負けぬ、と、なぜそこまで確信を持って言えるのだ？ 余にはまったく分からぬぞ」

詰め寄る王に、ブライはしれっとして答えた。

「それは」

「それは？」

「お分かりになりますまい」

「は？」

まったく予想だにできなかった返事に、オーギュスト王の思考が止まる。

その顔が、下から上へ、順に紅潮してゆく。

「ぶ、ぶ、ぶ」

「ああ、これは失敬。別に陛下を馬鹿にしたわけではございませぬ」

心頭に達する寸前のオーギュストの怒りを軽くないしながら、ブライは続ける。

「陛下だけではございませぬ。恐らくは、この状況を客観的に見て、姫様の勝ちだと純粹に思える者など、この世にはおらぬでしょう」

一瞬の間の後、続ける。

「 儂とクリフト以外には」

オーギュスト王の顔から、赤みが引いてゆく。

「 ブライ殿？」

「儂は、姫様のことを、それこそこの世に生を受けられた時から見ておりますからな。クリフトも、若いながら、もうかれこれ十年は姫様のおそばに付いておりまする」

遠い目で、ブライは言う。

「そうでなくては見えぬ、という物が ございましてな」

「それが、そなたがアリーナ姫が勝つと言い切った、その理由、というわけか」

「御意に」

「ふむ」

考え込む王。

目の前の人物は、まさに「生ける伝説」とも言うべき大魔道士。

そして、現在のサントハイム王の「知恵袋」とも言うべき人物。

その彼が、ここまで言うのだ。

自分には決して見えぬものを、確かに、アリーナ・フォン・サントハイムは持っているのかも知れない。

あの、燃えるような瞳を持つ少女は。

そして、オーギュストは、心を決めた。

「ブライ殿」

「は」

「余は改めて、娘の人生をアリーナ姫に賭けるぞ」

「おお、それでは！」

「うむ。大会はこのまま続行する」

(　　なんとか、なったの)

ブライは、内心、安堵した。

実はこの時、正直ブライにも、アリーナがデスピサロに勝てる、という確信は無かったのである。

もちろん、彼がオーギュスト王に語った言葉が嘘だ、と言うわけではない。

しかし、いくらアリーナを信じていたとしても、オーギュストの言う通り、現時点ではその実力差は歴然としている、と、ブライ自身、認めざるを得ない。

(　　迷いを見透かされては、元も子もないからの)

「アリーナ姫には、余の不明ゆえ迷惑を掛けるな」

思考を中断させたのは、王の申し訳なさそうな声であった。

「　　あ、いやいや」

慌てて答えるブライであったが  
(さすがに、責任を感じておるわけか どれ、ひとつサービスしてやろうかの)

「おお、そうじゃ。陛下」

「何か」

「こたび、確かにデスピサロとやらの力は圧倒的なものがありますれば いかがでしょう、ここで棄権者を募ってみては」

「棄権者を 募る？」

「は。無駄な人死にを避ける上でも、上策と存じまするが」

また、ほんの少し考えた後、オーギュスト王は訊ねた。

「ブライ殿、もしアリーナ姫が棄権するようなことがあれば 」

「ございませぬ」

王が言い終わらぬうちに、ブライが否定する。

「姫様が棄権することなど、決してございませぬ。決して」

先ほどと同じ、確信したブライの言葉であった。

「そうか」

王は、腕を組むと、しばし考え そして、もう一度、言った。

「なるほど、そうか」

王には、ブライの考えが分かったのである。

ここで、王が棄権者を募る。

もし、それに申し出ず、そのまま試合を続けた選手がいて、そして仮にこの先、その選手が命を落とすことがあったとしても

それは、棄権しなかった選手本人の責任、ということになる。

あるいは、募集の際にそう明示してもよい。

そして、それは、アリーナにとっても同じことなのだ。

オーギュスト王は、アリーナに棄権するチャンスを与えた。

しかし、それでもなおアリーナが棄権しないのならば、その責はアリーナ自身にある。

王は、アリーナがたとえ戦いに敗れ、命を失ったとしても、その責任を取る必要は(形式上は)なくなるのである。

ブライが断言するからには、アリーナは確かに「決して棄権しない」のであろう。

そして、「決して棄権しない」アリーナが万が一命を落とした場合に、王が免責されるよう。

ブライの発案の真の目的は、これであったのだ。

もちろん、表向きの理由は、ブライの言う通り、「無駄な人死にをなくす」ことである。それを大義名分として、オーギュスト王は、アリーナを戦いに巻き込み、その命を危険にさらした責任から逃れることができるわけである。

「それは良い。その案、使わせてもらうぞ」

オーギュスト王は、さっそく兵士を呼び、矢継ぎ早に指示を出す。

「会場の準備を。それと、再開および棄権者の募集にあたり、余が直々に説明する。手配を」

「はっ！」

兵士は、敬礼を残し、部屋を立ち去った。

\*

「ブライ殿」

兵士が去ったあと、オーギュストは、改めてブライの方を向き直り

「心より礼を言う」

頭を下げた。

一国の王が、他国の王臣に対して、だ。

「い、いけませぬ陛下。お手をお上げくだされ」

あまりに常識を越えた王の行動に、さすがに驚いた表情で、ブライが両手を振る。

が、王は頭を上げず、言った。

「良い。誰も見ておらぬ。それに、これが余の率直な気持ちなのだ」

嘘ではなかった。

ブライの提案が、この大会を、そしてこの国を、さらにはオーギュスト自身をも救うことになる。

オーギュストはそう思ったのだ。

そして、だからこそ、彼はやりすぎて見せたのである。

もし、ブライの言う通りアリーナがデスピサロに勝利し、この国が救われたならば、彼の提案がこの国に計り知れない貢献を果たしたことになる。

そしてそれは、サントハイムに対するエンドールのあまりに大きな「借り」として、後々までこの国に影響を及ぼすこととなる恐れがあった。

そこでオーギュストは、こうして今大げさに感謝してみせることで、その借りをできるだけこの場だけのものに抑えようとしたのである。

自らが、あえて恥をかくことで。

「余がいくら頭を下げても足りぬ、そう思っている。が、余にはこれぐらいしかできる事がないのだ」

それを聞いて、ブライは心の中で舌打ちした。

(しまった やられたわい)

一国の国王が、ここまで自分の恥をものともせず、頭を下げている以上、これ以上のことは、ブライとしても要求しにくい。

それを知っていて、王はこのような態度をとったのだ。

そして。

「これぐらいしかできる事がない」と、オーギュストは言っているのだ。

つまり、「もうこれ以上の事はしない」と。「これ以上の借りは作らない」と。

(この男、やはり狸か)

だが、そうは思えど、ここで突っ張っても、話がこじれるだけである。ブライは、ここは退くべし、と判断した。

「いえいえ、もうそのお気持ちだけで充分すぎます、勿体ないほどですじゃ」

作り笑いで答える。

だが、もちろん、それで終わるブライではない。神妙な口調で続けた。

「ただ できますれば、ひとつだけ、頼まれてはいただけませぬか」

「？」

顔を上げる王。怪訝そうな表情。

「あのデスピサロ たとえ、あやつの優勝を防ぎ得たとしても、あの男の存在は心に留めておくべきと考えます」

ブライは訥々と語る。

「あの男、先ほども申した通り、恐らく人間ではござらぬ。そしてあれだけの力を持って  
おる 同族を統べ、その長として、一軍を率いて人間と一戦交えることが、今後ないと

も限りませぬ」

「その時に、余に何かせよ、と？」

「御賢察恐れ入ります。いや、もちろん、僕の心配が杞憂に終われば、それに越したことはございませぬがな」

ワンクッション置き、たたみかける。

「ただ、もし万が一、そのようなことがあったなら 貴国には、他の各国をまとめ、率先してその先頭に立っていただきたいのですじゃ。世界最大の王国として」

「ふむ」

オーギュストは考える。

今考えなければならぬ問題がどうかは別として、プライの考えは間違っていない。デスピサロの危険性は、オーギュスト自身、先の試合で、自ら目にし、承知している。

そして、エンドールが名実ともに世界最大の王国である以上、そこを突かれては、それを統べる者として、無碍にはねつけるわけにもいかない。

王の自負のみならず、歴史ある王国の誇りそのものに傷が付くことになるからだ。

(やはり一筋縄ではゆかぬな。少しでも土産を持って帰ろうというわけか)

先ほどのプライと同じように、心の中で舌打ちをすると、世界最大の王国を統べる男は、重々しく言った。

「約束しよう」

「恐れ入ります」

それを聞き、プライが恭しく頭を下げる。

「さすがに、世界一の国王陛下は懐が広うございますな」

その言葉に、オーギュストはちらりとプライを見やり、ただ苦笑した。

こうして、「狸」と「魔人」の化かし合いは、両者痛み分けに終わったのだった。

\*

コロシアム  
闘技場、選手控え室。

「プライ、遅いわね」

アリーナがつぶやく。

確かに、プライがオーギュスト王と共にこの部屋を出てから、しばらくの時間が経過していた。

「こんな事態が起きてしまいましたから 今後どうするか、王様も、プライ様も、慎重

にお考えなのだと思います」

クリフトが、真顔で答える。

「うん」

気のない返事を返すアリーナ。

やや間をおいて、再び、アリーナのつぶやき。

「大会、どうなっちゃうんだろ」

アリーナが心配していたのは、大会そのものよりも、モニカの事である。

モニカの人生を決めるこの大会、それそのものが無くなってしまった場合、彼女の人生はいったいどうなってしまうのか、それがアリーナには想像もつかなかったのである。

「大丈夫です。きっと」

沈むアリーナの顔を見かねたクリフトが、わざと明るく言う。

「ブライ様もついてらっしゃいます。決して悪いようにはなりませんよ」

「そうね。そうよね」

アリーナの顔にも、かすかな微笑みが戻る。

優れた洞察力と、彼女を思う優しさ。

クリフトは常に自分を助けてくれる。今この瞬間も

改めて、アリーナはそのことを嘖みしめていた。

そのとき

軽い軋<sup>きし</sup>みとともに、控え室の扉が開いた。

大会の運命を決めた人物が、帰還したのだ。

選手たちの視線が、一点に集まる。

「ブライ！」

サントハイムの偉大なる守護神の元へ、アリーナが駆け寄る。

「どうなったの？ 大会はどうなるの？」

選手たちが固唾を飲んで見守る中、ブライは口を開いた。そして、その口が、今しがた決定した真実を告げた。

「大会は続行。そう、国王陛下はお決めになりました」

「　　っ！」

アリーナの顔が、ぱあっ、とほころぶ。モニカを救う道は閉ざされなかったのだ。

それとは対象的に、他の選手たちからは、悲鳴にも似た大きなどよめき上がる。

彼らにとっては、その決定は、自分たちが（無論、アリーナもだが）<sup>ジェノサイダー</sup>虐殺者デスピサロとの戦いを強いられることが決まった事に他ならないからであった。

「ただし」

ブライが、強い口調で続ける。

どよめきが止まり、ブライの次の言葉が、控え室に朗々と響き渡る。

「この後、各選手の棄権を受け付ける、陛下はそう仰せられましてな。もうすぐ発表がございますじゃろう」

おおおおお！

どよめきが、再び部屋を支配した。

だが、今度は悲鳴ではない。自らの「生」につながる、「死」を回避する道が開かれるそれを知った人々の、歓喜の声であった。

その声を背後に、ブライはアリーナに尋ねた。

「今のうちにお聞きしておきましょう」

それだけ聞いて、その意図を正確にとらえたアリーナが、即座に答えた。

「私が棄権するわけがないじゃない」

「ですな」

うなづくブライ。

<sup>あうん</sup>阿吽の呼吸であった。

\*

大会の行方は、大王国エンドールの行方は、こうして決まったのである。

そして。

この決定が後に、世界の行方そのものをも左右することになる。

もちろんそれは、本人たちはまだ窺い知らぬ事ではあったが。

（つづく）

---

< 次回予告 >

デスピサロの圧倒的な力を見てなお、戦い続けることを選んだ者たちがいた。

そして、もちろん、我らが不屈の<sup>ハイネス</sup>主女殿下も

次にアリーナの前に立ち塞がる男、バトランドのラゴス。

優男風に見える彼の力は、そして彼の手にする トライメラン の破壊力は、果たして  
どれほどのものなのか？

「不屈の<sup>ハイネス</sup>主女殿下」第 14 話 「ライオット・イン・ラゴス（仮）」

その二つ名は <sup>ライオット・イン</sup>騒乱を内に秘めし者 ！

---